



フェノロサ夫人の 東京日記

Apr.1897 - May.1900

村形明子 編

岸田夏子 画



序

東京大学創立期のお雇いアメリカ人、日本美術の恩人として知られるアーネスト・F・フェノロサ（一八五三―一九〇八）没後百周年記念の平成二〇年暮、『

フェノロサ夫人の日本日記 世界一周・京都へのハネムーン、一八九六年』（ミネルヴァ書房）を上梓した。その一年後、縁あって本誌十二月号特集「お雇い外国人の見た日本」に、「アーネスト・F・フェノロサ」を寄稿させていただいた。その延長としてフェノロサ夫人メアリー・M・フェノロサの日本日記の続編、東京日記のダイジェスト版を二年にわたり連載させていたくことになった。

昭和五三年秋、フェノロサと朋友ウィリアム・スタージス・ビゲロウ博士の墓のある滋賀県大津市と三井寺が、フェノロサ来日百周年記念行事を行ない、アラバマ州モビール市から令孫と関係者を招いたのがきっかけで、五五年モビール市立博物館に寄託された夫人の日記帳等十数冊、三千頁余を調査させていただいた。フェノロサが新夫人メアリーを伴って再来日、ハネムーンを過ごした京都の夏から秋にかけての三カ月の記録を、昭和五六年から翌年にかけて『京都新聞』に九〇回にわたり連載した。

大津市の記念行事の副産物として誕生した日本フェノロサ学会には設立発起人、創立幹事として関わり、編集委員、副会長、会長を歴任して昨秋早稲田大会を

経てこの三月会長を引退したところである。三〇年来懸案であったメアリー・フェノロサの日本日記の翻訳完結は、平成一六年、京都大学停年退職後の懸案となっている。この連載と並行して完訳刊行を目指すのが、限りある余生のささやかな夢の一つである。

メアリー・フェノロサ略伝

メアリー・マクニール・フェノロサ（一八六五―一九五四）は南北戦争直前、アラバマ州モビール市郊外の両親の避難先のプランテーションで生まれた。母ローラ・シブリーは大地主の息女で勝ち気な美女、父ウィリアム・マクニールは裕福な貿易商の子息、詩を書き、絵を描き、植物学を嗜む趣味人だった。戦後復興期のモビールでメアリーはアーヴィング私立女学校に入学、一七歳であまり年の違わないルドルフ・チェスターと結婚する。夫がテキサスで油田開発中病死し、二〇歳で一男のある寡婦となったメアリーは、実家に戻り、

●むらかた・あきこ 札幌生まれ。東京大学教養学部卒業後、同大学院進学。米ジョージワシントン大学博士号取得。京都大学総合人間学部・人間環境学研究所教授を経て同名名誉教授。日本フェノロサ学会前会長。編著書に『アーネスト・F・フェノロサ文書集成』（上下）、『フェノロサ夫人の日本日記』など。

母に倣って詩や小説を書き始めた。やがてかつての求愛者レドヤード・スコットの求婚を受け入れ、幼い息子アランを連れて、鹿児島造士館（現・鹿児島大学）で英語英文学を教える彼のもとへ赴く。明治二三年（一八九〇）横浜に着いたメアリーは結婚後、東京、日光、鎌倉、箱根を観光、神戸を経て鹿児島へ向かう。翌年も夫妻は休暇を関西で過ごす。二人の関係は破綻、妊娠したメアリーはアランと帰国、一八九二年二月実家で娘アーウィンを出産する。

後を追ってモビールに戻ったスコットと別居のまま、彼女はニューオーリンズの新聞に寄稿しながら文筆家を目指す。感傷的小説や社会的知的催しについて詳細に報道する「上品なジャーナリズム」にかなりの需要があり、ボストンはそうした文芸界の中心地であった。ボストン美術館日本美術部長助手の求人情報を得たメアリーはすぐに応募、ニューオーリンズ講演の帰途モビールに立寄ったフェノロサの面接を受けて合格した。

メアリー赴任の一年後、フェノロサ先妻リジーの離婚訴訟が勝訴、二カ月後二人はニューヨークで結婚する。一八九六年四月、ボストン美術館を辞したフェノ